

漢訳經典における gatha の訳語とその変遷

——絶・縛束・偈・伽他——

齊 藤 隆 信

はじめに

梵語の gāthā は、後漢の安世高によって「絶」と漢訳されたが、同じ後漢の支婁迦讖は新たに「偈」と訳し、更に句数を偶数に仕立て、句中の字数も均一化し、そしてこれが後の漢訳仏典の標準形態となっていく。

ここでは、gāthā の訳語の変遷——「絶」から「偈」へ改訳され、さらに「伽陀」や「伽他」といった複音節詞として写されるようになった要因を述べ、また「偈」は「偈陀」や「偈他」の略語なのか、などの諸問題を検証する。そして安世高訳『道地経』の「縛束」についても、あわせて検討を加える。

1. 『七処三觀経』と『雜阿含経』の偈

『七処三觀経』で gāthā は「絶」と訳され、高麗版に十二例、宋元明の三本には十五例を検出できる。以下に第十二経（『大正藏』二・八七七下）をあげる。

聞如是。一時仏在舍衛国、行在祇樹給孤独園。仏告比丘、若比丘有四行、不自侵、要近無為。何等為四？ 是間比丘持戒行戒律根、亦閉至自守意。飯食節度、不多食、不喜多食。上夜後夜常守行。是為四行。比丘不自侵、亦近為。從後說絶、

若比丘立戒根 亦撰食亦知節度 亦不離覺 如是行精進 上夜後夜不中止 要不自侵減要近無為

仏説如是。

「從後說絶」という定型の冠句と、「仏説如是」という定型の結句が前後に配され、その中間に置かれる文章は、その直前にある長行の内容（四行）を復唱している。したがって「從後說絶」（この後に絶を説く）の「絶」とは gāthā の訳語であり、後世の「偈」と同義であり、安世高が、gāthā を「絶」と漢訳していたことになる。

この「絶」は、同じく安世高訳であることが論証された一巻本の『雜阿含経』においても見られる。全二七経が収められる中、「絶」は七箇所を数える。以下に第二六経の全文を

あげる (二・四九八下)。

聞如是。一時仏在王舎国時、有婆羅門名為不侵行者、至仏所、与仏談一処坐。已一処坐、不侵行者向仏説如是、我名為不侵。仏報言、如名意亦爾。爾乃婆羅門応不侵。從後説絶、

若身不侵者 口善意亦然

如是名不侵 無所侵為奇

即不侵行者從坐起、持頭面著仏足下、從今持教誡、不復犯五戒。仏説如是。

この「從後説絶」に対する異訳の劉宋求那跋陀羅訳『雜阿含經』(二・三〇七下)、後秦失訳『別訳雜阿含經』(二・四〇一中)では、ともに「即説偈言」となっている。また残る六箇所の「從後説絶」、「説絶辭」、「説是絶」も、異訳ではみな「偈」とされている。このうち「絶辭」などは、後の「偈頌」と同じように梵漢混淆の複音節詞として訳されている唯一の例である。

2、「絶」の語音

安世高はなぜ *gatha* を「絶」と漢訳したのか。この「絶」は意識ではなく、音写語と考えられる⁽³⁾。したがって梵語 *gatha* の対音として用いられた「絶」の上古音の音価を確認しなければならぬ⁽⁴⁾。

「絶」…[*dzwial] : 従母、入声月部、合口、全濁齒音四等、

舌尖前の塞擦音

「偈」…[*gjadh] : 群母、去声祭部、開口、全濁牙音三等、

舌根の塞音

声母については、「絶」と「偈」の調音点の相違があり(舌尖音[*dz]と喉音[*g])、とても近似の声母とはなりえず、Zürcher もこれを保留している。よって *gatha* の対音としての声母は、この後漢にあつては「絶[*dz]」よりも、むしろ支婁迦讖の用いた「偈[*g]」がふさわしかったことになる。一方韻母については、「絶」も「偈」もともに元音は同じく「a」である。また韻尾もそれぞれ舌尖閉塞音「-t」、「-s」を有している。したがって「絶」と「偈」の韻母は、ともに梵語 *gatha* の対音となる音価を有していたといえる。

3、「偈」の定着

支婁迦讖以降は、安世高の「絶」を踏襲することなく、かわって「偈」が用いられるようになり、しだいにこれが定着していく。その原因を以下の二点に求めることができる。

①音価から

A (声母)、「絶」の推定声母[*dz]は舌尖前の塞擦音であり、*gatha* の対音として許容できなかった。一方で「偈」の声母である舌根塞音は対音として相応しかった。

B (元音)、「絶」の上古元音「a」が、中古への過渡期であ

る後漢において、舌の位置が上昇し、少しずつその音価を「s」に変化させてきたために、gathaにふさわしい対音から乖離しはじめていた。

② 語義から

「絶」は常用の文字で語義的性格が強いため、これを音写語に用いることは、混乱をまねきかねない。通常、音訳漢字はその文字だけでは独立した意味をなさず、語義性の弱い常用でない文字が用いられ、しかも動詞は避けられる傾向にある。これは現代漢語における外来語も同じである。一音節の「絶」は、ともすると意識語と誤解されかねないことから、支婁迦讖以降は「絶」にかわって「偈」を用いるようになったのであろう。仏典が訳出される後漢以前の漢籍における「偈」という字は、その使用頻度はきわめて少なく、常用の文字ではない。『莊子』（天道）・『詩経』（国風）・『漢書』卷七十などに見られる程度であり、それらは擬声語であつたり、また地名として用いられているにすぎないのである。

4、「偈」の複音節化とその時期

「偈」とは「陀」や「他」を省略した語であるとする者もいるが、少なくとも後漢から魏晋南北朝中期にいたる訳経中の「偈」は、舌尖閉塞韻尾「ㄐ」を帯びているため「偈陀」や「偈他」の略語ではなく、この一字で gatha の対音であつた。

漢訳経典における gatha の訳語とその変遷（齊藤）

もし漢訳者が gatha を複音節詞「偈陀」や「偈他」で漢訳するならば、「偈」の「ㄐ」が消失し、「ㄒ」に変化した後でなければならぬ。それはいつか。水谷真成は永明年間の詩人における去入の押韻情況と梵漢対音を調査した結果として、四世紀後半から五世紀の前半ごろには去声の閉鎖韻尾が消失し、入声とは独立したと報告された。その精確さは周祖謨『魏晋南北朝韻部之演変』（東大図書公司、一九九六年、台北）の合韻表と合韻譜によれば、去入通押の例がさらに長い期間にわたっていることから、追つて確認することができるのである。

中古漢語で「偈」の音価は「gaj」であり、gatha の音訳にはなりえない。そこで gatha の tha の対音漢字を補う必要が生じたために、同じく舌尖を調音点とする声母「ㄒ」を有する文字が必要となり、「他」が選択されてくる。その最初の事例は、おそらく東晋の僧伽提婆訳『中阿含経』（一・七〇九中）と思われる。

5、「伽他」の使用とその時期

「伽他（陀）」の最早の使用例としては羅什の訳経中に見られる『大品般若経』、『妙法蓮華経』、『仏藏経』、『華手経』が、それらはすべて十二部経を列挙する際に限られている。gatha が複音節詞で訳されると、「偈他」よりむしろ「伽他」が常見

となる。それは「偈」の中古音韻尾「二」では gatha の音写語として相応しくなく、長母音をあてる平声の「伽」（中古音 [ga]）が適当だったからである。上古音より入声韻尾をもたない「伽」は、「他」を補うことで「偈」とともに同じ時代を平行して用いられている。十二部経の中の gatha を「伽他」と写している羅什ではあるが、それ以外の箇所ではすべて「偈」を用いていることがその証である。このような同一漢訳者による「伽他」と「偈」の使い分けは、五世紀初頭から六世紀にかけて、仏馱跋陀羅・曇無讖・求那跋陀羅・法顕・菩提流支・般若流支などの訳経中にも同じことがいえるのである。よって「伽他」が用いられるようになったことが、ただちに去声「偈」の閉塞韻尾「二」の消失を物語っていることにはならないのである。同一漢訳者によって使い分けがなされた理由としては、十二部経を並べるさいに、「修多羅」「祇夜」「受記経」などと、みな複音節で表記されていることから、逆に一音節の「偈」では安定感がともなわないために、あえて複音節詞の「伽他」を用いたのではなからうか。

さて、それでは「伽他」が「偈」に代わる時期はいつであろうか。それには「偈」と同じ去声の閉塞韻尾を有する別の音写語を例として、その音写語が別の音写語に代わる時期を確認すればよい。それには「三昧」が格好の用例となる。支婁迦讖から用いられる「三昧」の上古音は [san-maɰh] であり、

sanmaɰhi の対音となっていた。しかし後に「味」（去声隊韻）の閉塞韻尾が消失して「二」に変化し、[maɰ] となったため、もはや音訳語であり続けることが不可能となる。そこで梵語の長母音の対音字を新たにあてる必要から、平声「摩 ma」が採用され、更に舌尖閉塞音を補うべく「地」も採用された。すべては「味」の音変化がもたらす現象であり、唐代以降の密教文献では「三摩地」(samamaiti) が常用となってくる。

では「三昧」から「三摩地」に代わる時期はいつか。そこで注目できるのは隋の闍那崛多(五三三〜六〇〇)の訳経である。彼の漢訳は北周武帝の廃仏(五七四)を境に前期と後期に分類できる。その後期の訳出は、『添品法華』を除けば開皇五年(五八五)から同十六年(五九六)に及び、総計三七部ある訳経のほとんどが現存する。ところで彼はその漢訳の初期から一貫して sanmaɰhi と gatha の訳語に「三昧」と「偈」をあてていたが、晩年の開皇十五年からは概ね「三摩地」と「伽他」に改めている。その理由として考えられることは、音価の変化によってほぼ同時期に「味」と「偈」の閉塞韻尾が消失したため、それぞれ sanmaɰhi と gatha の対音から乖離してしまったからであろう。

漢字音は急激に変化することなく、時間的にも空間的にも緩やかに変化し定着していく。「味」を含む祭部は字音の演変過程にある南北朝では、詩文において入声屑部と押韻させ

るものとそうでないものがあるように、それぞれの漢訳者においても一様ではなかったと言える。南北朝の中ごろから「偈」や「三昧」の漢字音がすでに梵語の対音としては相応しくなくなり、一部の訳者には自覚的となり、ついに隋の闍那崛多の最晩年における訳経中に顕在的となってきたのである。それは『大唐西域記』（五一・八八二下）や玄奘『一切経音義』（高麗藏三二・三二二下）などの記述からも証明しうるのである。

gāthā 偈 [*gāiθh] > [*gāi] ↓ 偈他 [*gāi-ta] ↓ 伽他 [*gā-ta]
samāhi 三昧 [*sam-nadh] > [*sam-nuai] → 三摩地 [*sam-mua-ti]

6、安世高訳『道地経』の偈

『出三藏本記集』十四（安世高伝）によると、外国三蔵の衆護が編集した本来の二十七章を、安世高が七章に剖析したものが『道地経』であるという。現存する『道地経』も七章からなっている。本経においては「絶」や「偈」の音写語は存在せず、「從後縛束説」や「從後束結説」などと意識されている。異訳の西晋竺法護訳『修行道地経』では「即説頌曰」や「於是頌曰」とされる（十五・一八二上下）。「縛束」「束結」は「まとめる・概括する・総結する」という義であり、「長行」の内容をこの後にまとめて説く」というような意味になる。安世高がある時は「絶」と音訳し、またある時は「縛束」「束

結」などと意識している。漢訳年代についていえば、『歴代三寶紀』の記事ではあるが、『七処三觀経』は元嘉元年（一五一）の訳出であり、『道地経』は漢永康元年（二六七）である。もしこれを信頼するならば、安世高ははじめ「絶」と音訳し、後に「縛束」などの意識をもって代替させたことになる。したがって「絶」を用いる訳出年次不明の『雜阿含経』は、『道地経』の訳出（二六七年）より以前になる可能性がある。

おわりに

安世高は gāthā の対音として「絶」を用いた。しかしその訳語を多く踏襲したはずの支婁迦讖はこれを用いずに、新たに「偈」を採用した。それは「絶」の声母の不一致と強い語義性のために忌避されたためと思われる。「偈」は声母も韻母も対音として相応しく、しかも語義性が弱く常用字ではないので、それ以後も長く用いられていく。

後漢から南北朝の中期ごろまでの「偈」の字音は、閉塞韻尾「[θ]」を伴うため、「陀」や「他」を略した語ではなく、一字で完全な音写語でありえたので、長期にわたる使用を可能にさせていた。しかし字音の変化により、その韻尾が漸進的に消失したため、南北朝末期から隋においては、もはや gāthā の対音であり続けることが不可能となった。そこで新たに「伽他」と写され、これが定着するようになる。それは「三

「味」が「三摩地」に改訳される理屈と同じであった。そしてこれらは訳経史上、隋の闍那崛多にはじまる。いずれにせよ訳語の変遷は漢字音の変化にともなう訳者の処置であったわけである。

また「絶」を用いた安世高は、「従後縛束説」という説明句的な漢訳も試していたことも確認できた。仏典の翻訳に前例がなかったため、安世高は自らが漢訳法規を確立しなければならなかったわけで、「絶」から「縛束」へ、そして「偈」への変遷は、初期訳経の苦慮を物語るものである。

- 1 林屋友次郎「安世高訳の維阿含と増一阿含」(『仏教研究』一卷二号、一九三七年)、Erik Zürcher (許理和) A New Look at the Earliest Chinese Buddhist Texts, *From Benares to Beijing: Essays on Buddhism and Chinese Religion* (Koichi Shinohara and Gregory Schopen, MOSAIC PRESS, 1991 中文訳は「關於初期漢訳仏経的新思考」(『漢語史研究集刊』第四輯、二〇〇一年)。
- 2 前掲林屋(一九三七)は椎尾弁匠の成果を高く評価し、本經の安世高訳出説を補強している。他に Paul Harrison 'Another Addition to the An Shigao Corpus? Preliminary Notes on an Early Chinese Samuktāgama Translation (校部建博士喜寿記念『初期仏教からアビダルマ』、平楽寺書店、二〇〇二年)がある。
- 3 李小荣・呉海勇「仏経偈頌与中古絶句的得名」(陳允吉編『仏經文学研究論集』、二〇〇四年)は、安世高の「絶」と中国詩の「絶句」を関連づけ、また「絶」が意識と音訳の双方を兼ね

ていることを示唆するが、賛同することはできない。
4 李方桂『上古音研究』(商務印書館、一九八〇年)にしたがう。

5 *Cong hou shuo jue* (dzhiwāt apparently is a transcription of gāthā: the initial remains puzzling) (前掲論文 p.295)。

6 朱慶之は「梵漢《法華經》中的偈、頌和偈頌(一)」(『漢語史研究集刊』第三輯、二〇〇〇年)において、「偈是不完全音訳、其双音節常見形式為偈陀」と述べる。

7 水谷真成は去声閉鎖音韻尾の消滅を四世紀後半から五世紀の前半であるとする。「上古の間における音韻史上の諸問題」(『中国文化叢書』言語)における上古音去声韻尾の消滅の項及び「永明期における新体詩の成立と去声の推移」(『吉川博士退休記念中国文学論集』)を参照。ともに『中国語史研究—中国語学とインド学との接点—』(三省堂、一九九四年)に収録。
8 「縛束」は『漢語大詞典』(九卷九六一頁)で「裏扎」(つむ)・「捆綁」(しばる)の義とする。前掲 Zurcher 論文では The following is said in gāthās (p.287) 'The following is said in a bound (=metrical?) way (p.295) とある。

〈キーワード〉絶、縛束、偈、伽他、字音変化

(佛敎大学講師)

found in the “Awakening of Faith in the Mahāyāna,” should be interpreted as “the essential truth of things” (*shin-nyo*) or “dharma body” (*hosshin*), and that therefore, the concept of *dhātu* differs from the concept of “original enlightenment.” I requested that Mr. Hakamaya did not use the terms “original enlightenment” and *dhātu* interchangeably when discoursing on *dhātu-vāda*, as referred to in Mr. Matsumoto’s writing. Mr. Matsumoto and Mr. Hakamaya responded to my proposal, defending their views.

At this time, I doubt that “original enlightenment” is *dhātu*, as found in the “Awakening of Faith in the Mahāyāna” (*Kishin-ron*)

The world of truth, which has no emergence and no disappearance, is the world of absoluteness. This human world, which has emergence and disappearance, is the relative world. While describing the Buddha’s enlightenment in the relative world (*shigaku*), the concept of “original enlightenment” is expounded in order to emphasize the contrast between “original enlightenment” in the world of truth (*hongaku*) and the Buddha’s enlightenment during His lifetime in India in the relative world (*shigaku*). Therefore, *dhātu* is not “original enlightenment.” This is my counter-response to Mr. Matsumoto and Mr. Hakamaya.

6. The Chinese Equivalent and Transition of *Gāthā* in the Chinese Buddhist Canon: *jue*, *fushu*, *ji*, and *qieta*

Takanobu SAITŌ

An Shigao of the Parthian Empire arrived at Luoyang in the Late Han Dynasty, and initiated translation of Buddhist texts into Chinese. Because he was a first translator, he experienced various difficulties with respect to selection of appropriate vocabulary and idiom. The chief difficulty was to determine proper word choice and usage essentially by himself. This paper addressed the question of why no later translators shared An Shigao’s equivalent for *gāthā*, *jue* 絕 and why the translator Jiumoluoshi (支婁迦讖) changed *jue* 絕 into *ji* 偈. Further, I explore why Shenajueduo (闍那崛多) in the Sui dynasty changed *ji* 偈 into *qieta* 伽他.